

創価大学設立構想 50 周年記念シンポジウム

開催日：2014 年 7 月 7 日 10 時 45 分～12 時 15 分

会 場：創価大学 大教室棟 S201 教室

内 容：基調報告 神立孝一

コメント報告 勘坂純市・富岡比呂子・牛田伸一・伊藤貴雄（司会）

ディスカッション

司会

本年は、創立者が創価大学の設立構想を発表されて満 50 周年にあたります。その時の創立構想の文章をご参加の皆さんと一緒に読みながら、これからの創価大学について共に考えて行きたいというのが本日のシンポジウムの主旨です。前半は神立孝一創価教育研究所所長の基調報告と各所員のコメント報告を行い、後半部分は皆さんとのディスカッションをしたいと思っています。それでは最初に神立所長から基調報告をお願いします。

基調報告：神立孝一

所長の神立です。今日は創価大学設立構想 50 周年を記念してのシンポジウムをきちんとやっておきたいということで、創価教育学研究所の企画、主催で、この授業の一時間をお借りしてシンポジウムを行うことになりました。ちょうど 50 周年という記念すべき日に、この場にいられるのは長い歴史上私たちだけですので、その意味も込めましてこのシンポジウムで意見を交換して、創価大学のことを、また更に次の 50 周年後のことを含めてみなさんと意見を交換できればと思いますのでよろしくお願いします。まず、私の方から簡単に基調報告ということで、事実確認といいますが、私たちが当然知っていなければならないことを確認するために 15 分から 20 分くらい話をさせて頂こうかと思っています。

まず、皆さんご存知かと思いますが、創価大学のホームページに 6 月 30 日、これは丁度本当の 50 周年ですけれども、創価大学の設立構想から 50 年を迎えてということで、田代理事長、馬場学長の二人の連名での公式的な発表がありました。そこで、一つの事実をきちんと確認された上で、これからの本学の方向付けを述べられています。これを踏まえつつ、私たちも今日は議論をしたいと思っています。本日の私の基調報告は、『聖教新聞』に掲載されている資料を使わせ

ていただきます。まず、事実確認ですが、創立者が創価大学の設立構想を正式に発表されたのは 1960（昭和 39）年の 6 月 30 日です。学生部の第 7 回総会という会合で創価大学の設立構想が発表されました。この創価大学の設立構想については授業の中でもお話ししたように、その淵源を辿っていきますと牧口常三郎先生が公的な立場で創価大学の設立ということの発言をされたのが昭和 14 年です。昭和 14 年に発言をされたときに、もし自分の代で創価大学の設立の夢が叶わないのであれば、それは戸田君、君に頼むよということで、戸田城聖先生にその意志が受け継がれていったわけです。その後、皆さんご存知のように日本は第二次世界大戦に入り、牧口先生と戸田先生お二人とも獄中で囚われの身となりました。牧口先生は、獄中で亡くなっていくわけですが、戦後出獄をされた戸田先生は牧口先生の遺志を継いで、創価大学の設立に取り組んでいかれます。しかしながら様々な条件の中でその実現はなかなかできなかった。そこで、昭和 25 年の 11 月 16 日に戸田先生は神田にある日大の食堂で、創立者に創価大学の設立構想を伝えました。そうして創価大学の設立の思いは創立者に受け継がれ、時を経て昭和 39 年に創価大学の設立構想が公的に発表されました。様々な創立者の本を読みますと、戸田先生が亡くなって 7 回忌が終わってからこの発表をすることに、随分とこだわりがあったようです。そして、7 回忌の法要が終わり、6 月に学生部の総会で創価大学の設立構想の発表という運びになっていきました。何がそこで語られたのかというと、資料にありますように、世界の平和に寄与する人材を育てることが骨子のお話であります。これは、創価大学または仮称富士文化大学を設置したい。その大学で世界の平和に寄与すべき大人材をつくりあげたい、そのときに諸君の中から、この諸君というのは当時会合に参加していた学生部のみなさんのことですけれども、諸君の中から大仏法を根底とし、各専門分野における大教授が出て、教鞭をとっていただきたい。その目的達成、すなわち世界の大指導者に育て上げるためにその大学で頑張っていただきたい。ここで創立者が述べられている世界の大人材とは何を指すのかというと、当然ながらここに示されているように、世界の平和に寄与できる人材、それが創価大学の設立の目的であることをここで明言されたわけです。

創価教育が具体的にどんな形で実践されたのかということ、これは創価大学の設立構想委員会等が立ち上がっていく中で、まず始めに高校をつくろうではないかということで 1968（昭和 43）年 4 月 8 日に創価学園が先に開校を迎えることになりました。この開校にあたって創立者は、入学式を祝うということで創価教育の目指すべき具体的な姿を述べられています。その中の骨子をあげてみました。そこには三つの事が掲げられています。「現今の教育界の実態を見るに、憂うべき事態はあまりにも多く、改善を待望する声は巷に満ち満ちている」と。その中でまず憂うべき事態の底流をなすものは、一つ目に教育理念の喪失、二つ目に若人の人格を軽視する風潮、三つ目に指導者の次代に対する責任感の欠如とあります。この三つの憂うべき事態を乗り越えるために、理想的な教育の確立を目指して我が創価学園は誕生したのだ、と創立者は述べられました。昭和 43 年 4 月の発表の翌月、5 月 5 日の第 31 回創価学会本部総会において、創立者はさらに創価大学の設立構想の内容について発言をされていきます。資料を見てください。「世間の注目的である創価大学の設立を当初の計画より 1 年早めて昭和 44 年 4 月 2 日の起工、そして昭和 45

年中に第1期の工事を完了し昭和46年4月開校を目標に進めてまいりたいと思います」と、ここで初めて具体的な創価大学の設立の日時をきちっと発表されています。それが1971年の4月であります。これは奇しくも牧口常三郎先生の生誕100周年にあたります。それも当初は1973年に設立をめざし準備を進めていたのを、わざわざ2年前倒しをして、そして創価大学をつくることになったのです。この2年の前倒しについては色々な意味があるだろうと思います。そこで創立者がお話されたのは、「我が国の大学の歴史をみるに、ご承知のごとく、代表的な大学は東京大学であります」そして、東京大学設立の目的は、「徳川三百年の鎖国による遅れを取り戻すために、西洋文明を急激に吸収し、国家のために働く人材をつくりだすことにあった」と述べ、「したがって、その建学の精神は、本来あるべき大学の崇高な理想精神とは、はるかに遠くかけ離れたものであった」と言われています。ここで、崇高な理想とは何なのかを私たちは読み取らなければなりません。その意図をどこでくみ取るのかというと、「真に望まれる人材」をつくることが大学の崇高な目的であり、「高い理念をもった優れた人格者であり、豊かな個性をもち、そのうえで学問、技術を使いこなしていける革新的にして創造的な人間であると考えます」と。従って創価大学を含めた大学そのものの設立の目的は、「学問、技術を使いこなしていける革新的にして創造的な人間」を育成することであるというのが、この時の発言の中の一つの結論だということになろうかと思います。

さらに、翌年、昭和44年5月3日の第32回創価学会本部総会での発言に繋がっていきます。創立者は具体的な創価大学設立のための目的、目指すべき点をきちっと述べられています。まず、「現在、世間においては各大学で紛争が勃発し、既存の理念や方策をもってしては、律しきれない深刻な社会問題と化していることは、ご承知のことと思います」という発言から始まっていきます。これは日本をはじめ、当時世界各地で大学紛争というのがおこってありました。若者たちが既存の教育のあり方について様々な点から疑問を投げかけた。大学のあり方が問い直されている時代でありました。それに対し、創価大学は応えていかねばならない、そういう使命を帯びさせているわけです。そして、「教授と学生との関係は、相互に対峙する関係ではなく、ともに学問の道を歩む同士として、あえていえば、先輩と後輩と言った、あくまでも民主的な関係でなくてはならない。今日の大学問題の行き詰まりも、直接的な原因をたずねてみれば、やはり教授と学生との隔絶感、対立思想にある」これが当時の大学が抱えていた最大の問題点だと言う指摘になります。これまでの大学は、教授が学生たちに水が上から下に垂れることを教えることを想定してつくられていた大学だと。でも、それは違うのではないか。むしろ学問の道を歩む同士として、教授と学生が共に理想に向かっていく場所、それが大学だ。現在いたって日本の各大学はこのようなことを言い出していますけれども、昭和44年の段階でこのような発言をした大学関係者は一人もいません。当時は、学生を大学の中心として考え、教授と学生が対話や議論を繰り広げるようなことは、全然想定されていませんでした。ですからこれはある種、歴史的な発言であると言ってもいいと思われます。さらにこの段階で創立者は創価大学の三つのモットーを提起されました。私は4期ですが、このモットーは草創の頃から、自分たちの大学が目指すべき理念と

して深く胸に刻んできました。皆さんもご存じのように、一つ目は「人間教育の最高学府たれ」二つ目に「新しき大文化建設の揺籃たれ」三つ目は、「人類の平和を守るフォートレス（要塞）たれ」です。創立者は一つ目の「人間教育の最高学府たれ」について「人間を、社会のメカニズムの部品と化し、人間性を無視している現代の教育界の実情に対して、創価大学は、あくまでも社会を動かし、社会をリードしていく英知と創造性に富んだ、全体人間をつくっていく学府でなくてはならない」と述べています。つまり創価大学の使命は、全体人間をつくることにあるということがきちっと定義づけられています。二つ目の「新しき大文化建設の揺籃たれ」については「行き詰まっている現代文明のなかにあって、大仏法を根底におき、人間生命の限りなき開花を基調とする、新しい大文化を担っていくこと」と述べられています。ここでは宗教を根底とした教育が一つの文化をつくっていくという卓見が示されています。そしてこれは、第三文明を建設しゆくあらゆる人材がこの創価大学から巣立っていかねばならないことを意味します。「第三文明」というのは、人間が自らの力を思う存分に発揮できる文明のことであり、それを担っていくことが創価大学の学生や卒業生の使命であるとのことが示されています。そして、最も重要であると思われる三つ目の「人類の平和を守る要塞たれ」については、「第三に人類の平和を標榜したゆえんは、新しき文明の建設といい、未来社会の開拓といっても、平和なくしてはありえないからであります。いかにして平和を守るか、これこそ人類の担った最大の課題であります。過去の指導者は、常に世界を戦乱の渦中に巻き込み、民衆を不幸のどん底に叩き込んでまいりました。今、私どものつくる創価大学は、民衆の側に立ち、民衆の平和と幸福を守るための要塞であり、牙城でなくてはならないと申し上げておきたい」と述べられています。何のために学問をするのか。究極的には平和を守るために何らかの貢献をするためなのです。とても抽象的な話に聞こえるかもしれませんが、私たちの日常生活の一つ一つが平和につながっていくのでしょうか。平和を守るという究極の目的を意識していくことが大切になっていくのだらうと思います。

50 年前の設立構想発表の段階から昭和 44 年までの創立者の発言をききますと、そこに一貫して流れていることは、三つのモットーに集約されているのだと思います。最後のまとめとして、創立者の創価大学設立の思いを知るために、昭和 47 年の第 2 回創大祭記念フェスティバルで語られた言葉をここで確認しておきたいと思います。「創価大学は学園紛争の炎が全世界で燃え盛っていた最中に、新しい真の学問、教育の場を現出すべき必然性のみを含んで建設された大学です。当初は昭和 48 年に発足する予定だった。しかしあまりにも学園紛争が激しく、色々な意味を含めて昭和 46 年に開校した。それゆえに 1 期生 2 期生は本来ならば創価大学がないのに入ってきたことになる。ここに意味がある。1 期生 2 期生の諸君はどうか自分たちがこの大学の創立者であると自覚し本気になってもらいたい。誰でも逃れることの出来ない宿命というものがある。そこに腹を決めたとき宿命は使命となってその人の一生を輝かせるのです」という発言をなさいました。これは 1 期生 2 期生だけではなく、おそらくずっと創価大学に籍を置く学生たちに対しての思いという風に受け止めても間違いではないと思います。創価大学の学生や教員一人一人がどのような使命を自ら感じ、それに基づいて行動していくのかということを、この一節から私た

ちは考えなければなりません。こうあるべきだという具体的なものは出てこないわけですが、一人一人が創価大学に籍を置くものとして責任をもち、創立の理念を確認しながら、目的を達成するために努力していくことが重要なのだと思っています。本日は、設立構想発表から50周年という節目でもありますので、ここにおられる学生の皆さんと議論し、設立の意味を互いに確認し合っていきたいと思います。私の基調報告は以上でございます。ありがとうございました。

コメント報告 1：勘坂純市

今回、設立構想をあらためて読ませていただき、このようなきちんとした原点がある大学は本当にいいなと思いました。パネリストの中で私だけが創価大学出身ではありませんので、私が学んだ国立大学と比較しながら、少し、お話をさせていただきたいと思います。まず、設立構想というカタチで、大学の理想像が示され、それを皆で目指しているということは、本当に素晴らしいと感じます。もちろん、創立者の掲げられた理想に比べれば、現在の大学はまだまだかも知れません。しかし、この目指すべき理想があるために、創価大学には素晴らしい伝統が築かれてきたと思います。例えば、設立構想には、「教授と学生との関係は相互に対峙する関係ではなく、共に学問の道を歩む同士として、あえて言えば先輩、後輩と言った民主的な関係でなくてはならない」とあります。今の大学がどこまで「民主的」かについては、学生の皆さんにもさまざまな意見があるかもしれません。しかし、少なくとも私の大学時代に比べたら、現在の創価大学での学生と教員の距離は、信じられないほど近いです。僕の大学時代には、教員の研究室が並んでいるフロアには、学生が立ち入れるような雰囲気はありませんでした。その階だけ赤い絨毯がひいてあった。それでオフィスアワーに来なさいといわれても、あの赤い絨毯がひいてあるところにいくのかと思うと、すごく憂鬱で、結局4年間で1回か2回しか、教員の研究室には行けませんでした。そうした大学に比べると、現在の創価大学の総合教育棟のように、教員の研究室の並びに学生の使うゼミ室があるというのは、はるかに「民主的」だと思います。これも、教員と学生が「共に学問の道を歩む同士」であるべきであるという設立構想で示された理想が、大きな創価大学の形を決めている例の一つだと思います。

また、大学の使命を、「新しき大文化建設の揺籃」「人類の平和を守る要塞」として、コスモポリタンな視点で示されている点も重要だと思います。創立者が指摘されているように、東京大学をはじめとした国立大学は、「国家のために働く人間をつくりだす」ためにつくられました。国家に有為な人間。これより他の人材像はないのです。これは思う以上に教育に影響を与えているんじゃないかと思っています。自分だけよければいいという生き方ではだめだ、とよく言われます。もっと大きな目的のために生きなくてはならない。では、その「もっと大きな目的」は何かといわれたとき、大学が「国のため」という以外の理想を示すことができない。それは、悲しいことです。これに対して、創価大学の設立構想では、大学が目指すべき社会の理想が、しっかりと語られている。創立者は、日本の大学に比べて、ヨーロッパの大学は、しっかりした「精神的支柱」をもち、崇高な理想を追求する使命感に貫かれてきた」と指摘されています。そうした、「精神

的支柱」「崇高な理想」が創価大学にはある。このことの意味は本当に大きいと今回改めて感じました。私の話は以上です。

コメント報告 2：富岡比呂子

神立先生からのお話もありましたように、創価大学の三つの建学の精神が書かれているところで、全体人間をつくっていく学府でなくてはならないという言葉があったかなと思います。私自身も全体人間ってどういう人のことを指すのだろうと考えておりまして、なかなかイメージ的に掴みどころがないというか、難しいところもあると思うんですけれども、これまで創立者が全体人間について言及されていたところがないかなと思って創立者の語らいを読んでみたんですね。そうしたら一つ見つけることができたんですけれども、今日の資料にはないのですが、第 11 回の創価大学の入学式（1981 年 4 月 6 日）で創立者が「知性と健康と人格を」というタイトルでスピーチをされました。少しそこを引用させていただきたいと思います。このスピーチの中で池田先生がルネ・ユイグ氏との対談について話をされていました。「私たちが、本質的には精神の危機に陥っている現代文明を蘇生させる鍵は、広い意味での教育であることを合意した後、その教育が目指すべき人間像を、ユイグ氏は、巧みな比喻で説明してくれました。人間教育は内的生命を開花させることによって『完全な人間』『全体人間』を目指すべきであるというのであります。それには何が必要かといえば、第一に豊潤なる感受性、第二に明晰な知性、第三に強靱な意志力、精神力である。ユイグ氏はこれを三頭立ての馬車にたとえ、“全体人間”という馬車が人生街道を疾駆していくためには、三つのうち、どれ一つとして欠かせないと主張しているのであります。私も全面的に同感であります。これからのリーダーは、それではなければ絶対にならない」という話がありまして、具体的にどういった人間のことをさすのかなと考えた時に、ここにあるような感受性ですとか知性、意志力、精神力というようなものがありましたので、これも一つヒントとして皆さんと一緒に考えていけたらなと思っております。

あともう一点はですね、全体人間というものを考えたときに、特に男女で差があるわけではないと思うのですが、女性の生き方に関して全体人間という観点から創立者が言及されている箇所がありましたので、こちらも一つご紹介をさせて頂ければと思います。小説『新・人間革命』の第 17 巻で関西創価女子学園の開学についての話が出ています。そこで目指すべき女性像について言及されている箇所がありますので読ませていただきます。「彼は、めざすべき女性像についても、以前から思索をめぐらせていた。――従来、日本の女性教育にあっては、多くは『良妻賢母』が、その理想とされた。だが、家事をやっていればよいという生き方では、人類の悲願である平和実現に寄与する大きな力とはなりえない。広く社会的な見識と、人生についての英知をもち、地域を、社会を舞台に活躍していける女性でなければならない。しかし、だからといって家庭など捨てて、職業婦人として自分の専門分野で力をつければよい、というものでもない。要請されるのは、家事であれ、仕事であれ、立派にこなし、豊かな個性をもち、文化や政治などの社会的な問題に対しても積極的に関わり、創造的な才能を発揮していくことのできる人である。つ

まり、何でもこなしていける“全体人間”である。それこそが、これからの目指す女性像である——」ということですね、これを読んだときに女性に対して創立者は本当に高い理想をもっておられるんだなと思ったんですけども、家事だけでもなく、仕事だけでもない、様々なところでバランスが取れていることが一つ大事なのではないかなと思いました。私の方からは以上にさせて頂きたいと思います。ありがとうございました。

コメント報告 3：牛田伸一

私からは、設立構想を読み返して私たちが議論しなければならない問題を次の三点にわたって指摘したいと思います。

一つは、設立構想の30頁の第一段落のなかで語られている内容、すなわち、大学は国家の婢であってならない、ということです。現在の高等教育政策を振り返ると、この「大学は国家の使用人であってはならない」との規範命題は、再び議論の俎上に載せなければならないテーマなのだと思います。創立者が語るように、少なくとも創価大学は国家に使役されることのない大学という願いから誕生したのですから。

私たちが再び問題化すべきだと思われる二つ目は、資料の最後にあるインタビューの内容から汲みあげられます。米国ジャーナリストと創立者との対談のところですが。ここでは平和の問題が論じられ、創価大学の建学の精神の一つである「人類の平和を守るフォートレスたれ」の意義が語られています。はやりここでも現在の時勢を眺めると、この建学の精神も再び問題化して議論しなければならないと考えます。日本の安全保障政策とその環境の大転換にある今であるからこそ、先ほど述べましたように、官制ではない大学としての創価大学は平和を守る殿堂でなければならない、との規範命題について、私たちがどのようにそれを解釈し今の生きた規範命題として掴みとるのか、ということが問われているように思われます。

最後はこれらの問題の議論を実際に展開する上で、大切だと思われる創立者の思考様式についてお話しします。大学論が語られる文脈では、創価大学は、先ほどの勘坂先生のお話のなかでも登場しました管制大学であってはならないし、また一部の私立大学のような商業主義に陥ってもいけない、と語られています。管制か商業か、国家のためか儲けのためか、という対立構造が洞察され、同時にそれを乗り越える第三の道が模索されようとしています。設立構想の別の箇所でも、資本主義と社会主義を止揚する、との表現が使われています。西側と東側の経済・政治体制の両極という二者択一を乗り越えることが意図されています。

ここからは個人的な見解になりますが、両極を越えた第三の答えが真なるもの正義なるものとして必ず存在する、と捉えてはならないのだろーうと思います。政治・経済体制の話为例に挙げると、資本主義でもない社会主義でもない、とするのであれば、それでは私を含めみなさんは、自分たちが生きるこの世界の体制に関して何をどう考え、そしてどのような決定を下していくのか、ここに十分に自覚的であることが大切なことなのだと考えます。

設立構想が出された時代は、右左の対立がまだ激しく繰り返されていました。右は右の価値を

強く信じている。それゆえにこそ右の色に世界を染めようとする。左は左の価値を確信している。それゆえにこそ、世界を左の色に染めようとする。両方は対立していても、根底のところでは、対立どころか同じ仲間だと言ってしまっているように思えます。なぜなら、両方はそれぞれが揺るぎない自分たちの価値を抱き、その価値を信じて疑わず、他者にそれを押し付けようとするからです。教育学的な批判を加えれば、ここから浮き上がってくる大切なことは、管制か商業か、右か左か、その対立構造を越えて第三の道を誰が決定するのか、ということにあります。それは、他の誰かが決めてくれることではなく、私たちそれぞれ自身が考えて自らに決定を下すということです。

このようなシンポジウム場で過去のテキストを取り上げ、問題化し、そして議論するのは、それぞれの決定を促すきっかけになるという意味で、価値あることなのだろうと思います。

コメント報告 4：伊藤貴雄

私の方からは、せっかくですので歴史的なお話をしようと思っております。やはり歴史的な背景・文脈というものをしっかりと捉えながら、テキストを読んでいくことが大事でしょう。神立先生と勘坂先生から大学紛争のお話でしたが、ちょっと付け加えておきます。大学紛争はご存じのように 1960 年代 70 年代に、全国の 150 ほどの大学で起きたものです。これに関して私は紀要『創価教育』創刊号に論文を書きましたが、その一部をここで紹介します。

1960 年代の学生の声を少し見ておきましょう。慶應義塾大学の自治会委員長は 1965 年に「値上げになっても福利厚生施設などの面で学生に還元される保証がない。図書館のイスは足りないし、先生の数も不足、その給与も低い」と述べています（小熊英二『1968 若者たちの叛乱とその背景（上）』新曜社、2009 年、345 ページ参照）。また、翌 1966 年に、早稲田大学の無党派学生は次のような声明を出しています。「現実のワセダは人間不在、学生不在の企業経営主義だけが横行しているのです。[…] ワセダに現在必要なものは立派な建物ではなく教授と学生の自治で運営される本来の大学の姿です」（同、379 ページ参照）。

一方、大学紛争を起こした学生について、当時の学者や評論家はどのような発言をしていたでしょうか。たとえば明治大学教授で評論家の藤原弘達は、「ただの反社会的な集団による気違いじみた、子供じみた暴動でしかない。社会的な背景も原因もとばしい“百姓一揆”以前のものだ」と述べています（池田論「生命を賭けた師弟関係の提唱」、『現代の眼』1967 年 12 月号、112 ページ参照）。また、京都大学教授で歴史家の会田勇次は、「こんな異常児を見てやる責任は大学にはまったくない。学生は実践ではなく理論を学ぶもの、その本分にもとるかれらは絶対退学させなければならない」と述べています（同、112 ページ参照）。さらに、法政大学文学部長で英文学者の岡本成蹊は、「これが師と呼ぶべき人に対して取り得る態度であろうか。おそらく彼ら [= 学生たち] はわれわれを師とっていないのだろう。彼らはすでに学生ではなくなっている」と述べています（岡本成蹊「学生活動家に与う」、『自由』1967 年 12 月号、24 ページ）。東京工業大学教授で評論家の桶谷繁雄は、「教える者と教えられる者との上下関係と、それを緊

密に結びつける直接的なコミュニケーションが教育の原型であると私は言った。[…] そのような善意と信頼の関係を、全学連たちは破ったのである」と述べています（桶谷繁雄「学生対策を叱る」、『自由』1968年11月号、42ページ）。

これらの教授たちの発言を聞いて皆さんはどう思いますか。彼らは学生のことを「気違いじみた、子供じみた」、「異常児」と呼んでいますね。その際、自分たち教員が師匠であって、学生は弟子だというわけですね。自分たちは教える側で、学生は教えられる側である、と。こうしてみると当時の学术界には、このように教員と学生との関係を《上下関係》で捉える見方が、一つの大きな風潮としてあったのだらうと思います。

これに対して、創価大学の設立構想には何と書いてあるでしょうか。教員と学生とは、一緒に学びゆく同志のようなものだ、と書いてあります。対等な、いわば水平関係として教員と学生とを捉えていますね。先ほど紹介した学者・評論家たちの発言と比較すると、この設立構想は当時ではかなり先進的な主張であつただらうと思います。

もっとも、学生の側に立った学者もいました。有名なのは大熊信行という経済学者ですね。彼は、神奈川大学教授をしていた1968年に、「新しい大学の理念からいえば、新しい組織は、もはや人間の上下関係を認めるものであってはならない。新しい大学を大学たらしめるもの。それこそは成人たる全学生の運営参加という民主主義的原則でなければならない」と述べています（大熊信行「国家権力と大学の運命」、『潮』1968年11月号、78ページ）。大熊は当時有名な評論家でしたが、その後創価大学ができるときに創立者の理念に共鳴して、創立者とも対談し、自ら創価大学の最初の経済学部教授の一人になりました。

こうした歴史的な文脈を踏まえて考えると、教育を上下関係ではなく水平関係として捉えるという発想、すなわち、教員が教える側で学生が学ぶ側というのではなく、教員も学生も共に《学ぶ存在》であるという発想が、創価大学設立構想の根幹にあつたのだと思います。歴史的な文脈とセットでこの設立構想を読んでいくことが大事だ、と最初に申し上げたのは、以上のような理由からです。これでもって私の報告とさせていただきます。

ということで、以上4名の所員が話しました。ここまでの教員が担った部分で、ここからはまさしく創立構想の精神に立脚し、我々が皆さん方と一緒に学ぶ、あるいはむしろ我々が皆さん方から教えていただく、そういう方向にシンポジウムの舵を切りたいと思います。

ここからは皆さん方が中心です。創価大学設立構想を読んでみて、どのようにお考えになりましたか。ある人は、創価大学がこの設立構想に沿って歩んできたこと、現実には歩んでいることを実感されたかもしれません。あるいは反対に、設立構想に照らしてまだ創価大学が乗り越えないといけない課題を抱えていると思われた方もいるでしょう。創価大学がこの設立構想に基づきながらこれからどういう方向に進んでいくとよいのか、皆さん方から自由なご意見を伺いたいと思います。質問でも何でも結構です。

ディスカッション

学生 A：私は工学部一年生です。東京大学のように以前から作られた大学のほとんどは国の発展のために学問を勉強して、それを社会に生かしていくという教育理念だったと思います。創大は本来の教育理念として世界の平和に寄与すべき大人材を作りあげてを挙げています。あの当時は、あまりグローバルな時代ではなかったと思うのですが、もうこのころからすでに、創立者はすでに世界がグローバルな社会に発展していくことを予想していたのでしょうか。

勘坂：そうだと思います。創立者は、あの時代から、世界の大学とどんどんネットワークを広げていかれた。例えばアフリカの大学とこんなに交流を持っている大学は他にはないとおもいます。そこは本当にすごい。その結果、ある意味で、創価大学は、東大なんかよりも国際的なところがある。もちろん近年は、東大をはじめとして、日本の多くの大学が真剣に国際化を図ろうとしている。本当の勝負はこれからだと思います。

また、これは少し質問とはずれるかもしれませんが、東京大学と創価大学の大きな違いについて付け加えさせてください。東大で歌われる一高寮歌「嗚呼玉杯に花うけて」という歌に次のような一節があります。「治安の夢に耽りたる 栄華の巷低く見て 向ヶ岡にそそり立つ 五寮の健児意気高し」。「治安の夢に耽りたる 栄華の巷」、つまり世間一般の人びとは楽しそうに生活している。だけれども、彼らは世界の本当の厳しさを知らない。その「栄華の巷」を低く見る。これは、単なるエリート意識ではありません。民衆の「栄華」を守る「治安」を自分たちが担わなければならないという強い使命感が、彼らにはあった。そういうふうな学風は残っています。

これに対して創価大学では、創立者が、「大学は大学に行きたくても行けなかった人に尽くすためにある」と仰る。これは、先の一高寮歌の精神に似ているように見えるかもしれない。しかし、決定的な違いがある。それは、「大学に行きたくても行けなかった人」を尊敬していく精神を教えられていることです。「栄華の巷を低く見る」という発想はそこにはない。それは、皆さんが思っている以上に、人格形成に大きな影響を与えていると思います。

伊藤：「世界市民」「地球市民」という言葉は、今でこそ日本中の大学が教育理念に掲げていますが、この言葉についても、しっかり歴史的な文脈を押さえておく必要があると思います。これに関しては私も現在研究中ですので（「近代日本における『世界市民』の概念史」『創価大学人間学論集』連載中）、今日は、この言葉がこれまで日本の学術界でどのくらい使われてきたか、という点だけお話しします。

皓星社「雑誌記事索引集成データベース」によれば、「世界市民」という言葉をタイトルに含む雑誌記事は、終戦から 1994 年までの 50 年間で 26 件であるのに対し、1995 年から 2010 年までの 15 年間では 120 件に上ります。また、「地球市民」という言葉をタイトルに含むものに至っては、終戦から 1994 年までの 50 年間で 27 件であるのに対し、1995 年から 2010 年までの 15 年間で 369 件となっています。いずれの言葉についてもとくに 2001 年 9 月 11 日のニューヨーク同

時多発テロ事件以後の件数増加が著しいことが窺えます。

要するに、1945年に太平洋戦争が終わって1995年までの約50年間において、日本の学術論文の題名に「世界市民」や「地球市民」という言葉が出たことは、60件もないのです。ところが、その後1995年から2010年までの15年間で、500件近くあります。つまり地球市民、世界市民という言葉は多くの学者たちが使い始めたのは、1990年代後半からということです。

では、本学の創立者の場合はどうでしょうか。私の調べた限り、創立者の発言のなかで世界市民という四字熟語が初めて登場するのは、1975年の1月に、当時の国連事務総長のワルトハイムと会談したときです。創価大学の学生に対するスピーチで、この言葉が初めて登場したのは、その数か月後の5月、2期生との懇談においてです（創価大学学生自治会編『新書版 創立者の語らい』第1巻参照）。

つまり、1975年の段階で世界市民、地球市民について語っている。1970年代にこれらの言葉がどのくらい日本の中で語られていたのかは私も正確には分かりませんが、少なくとも日本の学術論文のタイトルだけ見てもまだほとんど注目されていなかったと思われる時代に、創立者が地球市民、世界市民という言葉を使われたというのは一つの先見性だったといえると思います。

学生B：工学部生命情報工学科の学生です。質問ですが、さっき牛田先生の問題提起のなかでも触れられた「すなわち資本主義、社会主義を止揚する」という言葉から、ちょっと思い当たる創立者の発言を思い出しました。今年の「SGIの日記念提言」で語られていた、「善悪二元論による峻別」が社会を蝕むという話です。そこでは、「自分の側に「善」を置き、自分が敵対する人々をおしなべて「悪」とみなす思想は、イデオロギー対立が世界を分断した東西冷戦が終結した後も、さまざまに形を変えて多くの問題を引き起こしています」という文章があり、その最後のところに、「いかなる人も抑圧してはならないとの原則に立って、社会の歪みを一つ一つ修復する努力を粘り強く進める中でこそ、問題解決の地平は開けてくるのではないかと思います」とありました。まさにこの社会主義、資本主義を止揚するにはその如何なる人も抑圧してはならないという原則が必要なのではないかと僕は思ったんですが、そのいかなる人も抑圧してはならないという原則を守ってまた達成していくには具体的にどのようなことが必要だとお考えになりますか。また、それはなぜでしょうか。牛田先生をお願いします。あと伊藤先生にも。

牛田：ご質問のなかで言ってくれていたことがそのまま一つの回答になっているようにも思えますが、それを私なりにより容易な表現で言い換えれば、「お互いに相手の話に耳を傾ける」ことだと思います。それぞれが自己の絶対化を回避しているからこそ、互いが互いに耳を傾けることができる。自分が正しいと思っている人は、人の話を聞くふりはすることはあっても、本当に耳を傾けることなどあるのでしょうか。この相互に耳を傾ける関係は、国家間の関係の場合であろうが、人間関係の場合であろうが、教師と生徒あるいは大人と子どもの関係の場合であろうが、おそらく大切にされるべき理念だと思います。

これを創価大学の学生のみなさんがよく使う言葉にすれば、「対話」と表現できます。ただし注意しなければならないのは、「対話」と「説得」の間の区別を厳密にすべきだということです。「説得」を意図する側は、自分自身の考えが相手とのコミュニケーションを通して変化させられるかもしれない、という可能性を排除します。それどころか「説得」する側は、自分が自分の変化可能性を排除していることには気づかず、相手の変化だけを求めます。相手とのコミュニケーションを通して相手に自分と同じ人間になってもらいたいと考えます。なぜそれができるのか、この理由はそれほど複雑ではありません。その人は自分が正しいと思っているからです。「対話」はこうした「説得」ではありません。「対話」は相互のコミュニケーションによってお互いの考えが根本的に変わり得るかもしれない可能性を抱えた試みのことです。そういう意味では、自分を壊す試みであると同時に、新たに構築する営みでもあります。

随分と偉そうに述べましたが、私にそうした謙虚さがいつもあるかと問われれば、自省しなければなりません。

伊藤：ご質問の意味をあまり理解していないかもしれませんが、「資本主義と社会主義とを止揚」という場合の、資本主義 vs. 社会主義という二項対立の図式。これもとくに 1960 年代 70 年代に顕著だった問題意識ですね。そういう点では当時の特殊な話のようです。今あなたと牛田さんはその話を現代に応用してディスカッションされました。私はこういう思考作業はとても大事だと思います。今日私は歴史的文脈に重点を置いてお話ししましたが、一方、どんなテキストにも一定の歴史的制約の中で語っているという限界もあるわけです。ではどうやってその限界を乗り越えていくのか。ここで、「創立者の発言だから全部正しいんだ」という見方をとると、これは教条主義ですね。そうではなく、「もし創立者が今ここにいたらどういう発言をするだろうか」というふうに、その思想のエッセンスを現代に応用して解釈していく必要があるでしょう。ですから、資本主義と社会主義についても、すぐスミスとマルクスとを対立させるのではなくて、もしアダム・スミスが今ここにいたら日本の社会格差をどう論じるだろうかとか、もしマルクスならば日本の集団的自衛権論議を見てどう思うだろうかとか、そういう思考実験を重ねてみるということです。思想を固定化させて捉えるのではなくて、その時代を超えて貫く普遍性を我々がつかんでいけるかどうか。今、あなたと牛田さんは、創立者のテキストを絶対化させずに自分自身の中で現代に応用しながら読むという良い事例を展開してくれたように思いました。

勘坂：まず、テキストを確認しておきましょう。創立者は、「更に人間主義経済の研究、すなわち資本主義、社会主義を止揚する、人類の新しい経済のあり方について、理論的・実践的な研究もしていったらどうか」と述べられています。「資本主義、社会主義を止揚する」というのは、ここに出てくる言葉です。「人間主義経済の探求」という文脈でそれは語られています。ただ、「人間主義経済学」とは何かというのも難しい問題です。しばしば、学生にも「人間主義経済学とは何ですか」と聞かれますが、結論めいた話はできません。

一つの試論ですが、私は、「人間主義経済学」は、いわゆる「新古典派経済学」「ケインズ経済学」「マルクス経済学」といった経済学の一つとして並ぶのではないと思っています。「いかなる人も抑圧」しないような経済の仕組みを作ろうと思っても、正直できないと思う。資本主義でもない社会主義でもない「人間主義」の経済システムができれば、誰も抑圧されない、そういうことではないのではないかと。むしろ具体的に困っている人たちの一つひとつ問題を一個一個解決していくそういう“運動体”としてしか、人間主義経済学はありえないと僕は思います。具体的な社会的問題に困っている人たちの助ける智慧を持った人材、経済学を含めた様々な学問、知識を現実の場に応用していける智慧を持った人材を輩出し、その人たちが少しずつ社会を変えていくしか、この社会をよくしていく道はないと思う。だから、抽象的イデオロギーとして語られる「資本主義」とか「社会主義」とは、「人間主義経済学」は違う。その意味で、まさに、先の質問で学生が引用してくれた文章で創立者が仰っている通り、「いかなる人も抑圧してはならないとの原則に立って、社会の歪みを一つ一つ修復する努力を粘り強く進める中でこそ、問題解決の地平は開けてくる」のだと思います。私からはそのぐらいで。

学生C：文学部1年の学生です。建学の精神についての創大生の意識について思うのですが、おそらく大学草創期の頃はわりと創価学会が作った大学ということで創価学会員の中でこの理念についての意識が全体的に高かったと思うんです。で、今は逆に、わりと創価学会に関係なく、会員でない学生の受け入れも、テレビでCMもやっているくらいなので広がっています。あと、けっこう友人から聞くんですが、自分からというよりは親に薦められて受験したという話があって、そういう意味で建学の精神についてそれほど意識がない学生も増えているのではないかと感じます。そういう今の状況に関して先生方は今どのように考えてらっしゃるのでしょうか。

神立：はい。まず1つは先ほど伊藤先生が、草創期の創価大学の設立の時の歴史的な背景を説明してくださいました。そのときには僕らの周りでも学生運動というのは非常に盛んで、僕らの一つ上の学年の先輩たちというのはむしろ高校闘争というのをやってたんですね。都立高校でもバリケード作って、自分たちで自主授業をやったりなんかするっていうような、そういう意識持ってる人たちがすごく多かったんです。ですから時代背景として一ついえることは、今自分がここにいる意味を自分の言葉で語れない奴は、それは語る資格はないんだ、みたいなそういう先輩たちとの打ち合いみたいなのがすごくあって、とにかく自分の考え、それから例えば一つの文章読んだときに自分の感想、思い、そういう自分の立場みたいなことを徹底的に自分で説明がつかないと許されないみたいな雰囲気があったんですね。それは当時の社会的状況だと思います。でも今はそういう状況では全然ない。だけれども、根本的には、一体自分はなぜここにいるんだろうか、なぜここで勉強するんだろうか、何のために何をやろうとしてるのかっていうのはやっぱり絶えず問いかけているのは事実だと思うんですね。ですから、草創期の先輩たちは本当に自ら望んで創価大学に入りたくて入ったのか。確かにそういう人たちはたくさんいました。しかし、

そうではない人もやっぱりいるわけですよ。親にいわれて入った、そういう人もいるわけ。やっぱりそれは現実にはね。割合は多少違うかもしれないけど、でも創価大学に入って自分は一体何をを目指すのか、どういうことを学んでいくのか。そういう意味では僕は基本的には建学の理念とか建学の三つのモットーとかに対しての、考えなきゃいけないっていうことはあんまり変わらないのではないかな、というふうに思っています。また変わってはいけないことだとも思っています。ただ、それについての様々な条件がたぶん違うんじゃないかなと。だから直接、その意識とか三大モットーというのはどうとらえてどう生かしていくかっていうのは、時代とともに変わっていくべきなんだと思う。その意味では僕たちが学生の頃っていうのは、大学というよりも議論といいますか、いかに相手を負かすのかみたいなですね、そういう激論みたいなのが多かったので、どうしてもなんかこう背伸びをしてですね、地に足のつかないような議論をしてたんじゃないかなって今自分で振り返ってみると思うんですね。ですから、そこまで激論する必要は全然ないと思うけれども、あの多くの創大生がこの三精神モットーとかこういう設立構想 50 周年っていうような大きな機会を、僕らでも好むと好まざるにかかわらずここにいるわけですから、これを1つのきっかけにして、自分のものとしてどういうふうに語れるのかってことは考えてほしいことなんじゃないかなというふうに思っています。それはむしろ皆さんに考えてもらいたい。それは意識があるのかないのかっていうことよりも、これは意識をもっていこうよっていうことだと思う。これはたぶん、意識があるのかないのかっていわれと、別に草創の頃とあんまり変わらないんじゃないかなっていうのが僕自身の感想なんですけども、時代が変わって、ちょっと違うのでその表現の仕方とか表明の仕方が多少違ってることを感じて思っています。答えになっていますか。

学生 C：はい、有難うございました。そういう意味では衰退傾向ではないっていうことでよろしいですか。

神立：はい、そう思います。

学生 C：安心しました。

牛田：強調しておきたいのは、伝承問題というのはどの社会でも本当に難しいことだということです。創価大学の建学の精神の伝承にも同じ難しさがあるはずですよ。単に単語だけがその世界で使われていさえすれば、それが暗唱されていさえすれば、それで以って建学の精神の伝承が成立している、とは言えないのだと思う。なぜその精神が語られなければならなかったのか、そういった切実さから生まれた精神にはどのような意味が込められていたのか、これを今の時代を生きる私たちが抱く問いを原動力にして、想起的に問題化しなければ、それが意味をともなったものとして生き続けることはできないでしょう。こうした想起的な問題化がなされなくなった

とき、表面的な記号だけが飛び交って、中身の反省のないスローガンになっていくのでしょう。この未来については、創価大学も他人ごとではないと考えておかねばなりません。

学生 D：私は交換留学生です。質問なのですが、創価大学では、トランスジェンダーについてどう語っていますか。これは創価教育に含まれているのか。寮では男性と女性とかはっきり別々とかあるので、創価教育の中で何らかの考え方があるのでしょうか。

富岡：そうですね、今、大学寮が男女別ということについてですが、日本は建物自体も男子寮、女子寮と別棟になっていることが多いですね。私はアメリカの大学院に行ったんですけれども、学内にある寮は基本的に男女同じ建物で、なおかつ、階によっては同じレーンに男子学生の部屋、女子学生の部屋と並んでいるようなエリアもありました。それぐらい自由、というか男女という性別で区分けすることをあえて行っていない状況だなと感じました。

次に、男性や女性としてのあり方について創立者の指導についてひとつご紹介をさせていただきたいと思います。先ほどの小説『新・人間革命』の中で紹介させていただきましたが、創価女子学園が1973年に創立されました。その草創期に学んだ卒業生の方たちに私がインタビューさせていただく機会があったんですね。そのときに、いわゆる女子学園、女子校としてスタートした関西の創価学園なんですけれども、そこで女性向けの指導のようなものがありましたかという質問をいたしました。なぜかと申しますと、1970年代という時代を考えますと、いわゆる女子校というのは、共学の学校よりも、良妻賢母を養成する志向性が主流であったからです。

そこで多くの回答者の方々は口をそろえて、「創価女子学園では、女性だからこうしなさい、とか、女性だからこういう生き方をしろ、というような指導は一切受けていません」と言われるんですね。また、「創立者の指導の中で、良妻賢母になりなさいっていうのは一切ありませんでした」と。つまり、創立者は、「女性としてどうあるべきか」ではなく、「一人の人間として、どうあるべきか、どう生きるべきか」についての普遍的な指導をしてくださっていた、と言われていました。そういう男性とか女性とかっていう枠にとらわれず、「人間」として、卒業後も続いていく各々の人生をどう生きていくべきなのかということに着目しておられたというふうに伺っております。

神立：トランスジェンダーについては、ご専門の坂本辰朗先生がこの場にいらっしゃいますので一言コメントをお願いしたいと思います。

坂本：いまのお話はたぶん二つのことがいえると思います。第一に、私はおそらくこの大学には一番古くからいる人間で、1981年からいます。ですから、80年代と現在を比べますとジェンダーの問題、今の方がはるかに皆さん敏感になっている。今、トランスジェンダーという話が出るということ自体がかつては考えられなかった。例えばこういう教室がありますと、誰が線引いた

か分かりませんが、ここら辺から線が引かれていまして、男性・女性できれいに分かれているんです。男性と女性が並んで座るなんてありえませんでした。見えない規制が加わっていて、皆がそれを当たり前として従っていた。だから今の時代がそういった意味では自由に話し合うという機会が増えていることが——というと察はどうなんだって話が出てくるかもしれませんが——違います。第二に、今、富岡先生からもアメリカの話がありましたけども、アメリカの場合には、ジェンダーの問題はもう投げちゃってるところがあるんですね。ジェンダーの問題、考えるのはもうやめよう。たとえば男と女が一緒に来て仲良くなったらどうすんだ。いや、なんで男と女が仲良くなるんだ。男と男、女と女っていうのはないのか。それからエイセクシャル（asexual、男性にも女性にも性愛をもたない）の場合はどうなるのか。こんな面倒な問題はもう考えるのはやめよう、なるように任せてしまえ、という話です。これでいいかっていいますと、私は必ずしもよくないと思います。なぜかっていうと、ジェンダーの問題っていうのはすごく大事な問題なんです。やっぱり考えるべきだ。ただ正解はありません。これが正しい考え方っておそらくない。考えないといけないことは考えるのであって、ある場合はそれは気を付けてジェンダーを意識しよう、ある場合には無視してかまわないということになるんです。ですから、考えることが大事なのであって。常に考え続けることが大事だと。創価大学はそういう意味では、ジェンダーの問題をまだ捨ててないというところが良いということじゃないでしょうか。

神立：有難うございました。えっと、創価教育の中でジェンダーということですけども僕も、今、坂本先生がおっしゃったことと基本変わりはないんですが、最も根幹でおっしゃってることは一体何かっていうと男女に差はないってことを絶えず、ずっといわれ続けてるんじゃないかなというふうに思っています。男性も女性も共に平和を目指す存在であり、男性も女性も共に幸福を目指す存在である。その意味では全く差はないというのがある種創価教育、創価の思想であると。なぜならば、人間が価値創造するためにここに存在するのであるとするならば、それは性別の差あるいはいろんなハンディキャップの差、これらは関係なく、価値を創造していくという創造者、創造的人間であるんだということにおいては、差がないんだということずっといわれているんだというふうに僕自身は受け取っています。ですから、本当にもしジェンダーの話になればもうちょっとこういういろんな形で語らなければいけないのかもしれませんが、今、坂本先生がおっしゃったことと、もう一つはその基本的には男女は、差はないんだと、人間として平等なんだということが創価の教育の場で語られている言葉なんじゃないかなというふうに思っています。

司会：まだディスカッションを続けたいところですが、ちょうど時間となりましたので、このあと次の授業に急ぐ学生さんもいるでしょうから、名残惜しくはありますが、これで創価大学設立構想 50 周年記念シンポジウムを終わります。我々としても、未来の創価大学をより良い学問の共同体にしていきたいと思っておりますので、そういう意味で今日は色々ご指摘やご意見をくださった全ての方々に感謝したいと思います。大変に有難うございました。